

## 論文

# オールダス・ハックスリーと自己実現

—『島』を中心に—

小川 桂子

### 要 旨

1932年出版のアンチユートピアの未来小説『素晴らしい新世界』執筆を機に、理想の社会を模索し始めたハックスリーは、評論集『素晴らしい新世界再訪』などを経、1962年『島』を発表する。ハックスリーのスワン・ソングとも言うべきこの『島』において、時間を1961年に設定し、当時の世界情勢にフィクションを織り交ぜながら、ハックスリーは自身の理想の社会を展開していく。従来、『島』はさまざまな批判にさらされてきたが、エココンシャスな里山的スローライフを営むパラの人々は、十分な食料供給と細部にまで配慮された教育とがもたらす安定した社会状況のなかで、個人の可能性を最大限、生活に生かすことのできる環境を与えられている。こうして「自己実現」の機会をもち、「自己実現」の道を歩む架空の島、パラの人々は、その結果、自己充足し幸福な生活を送っている。ハックスリーは、「自己実現」という高度な欲求を満足させていくには、まず低次の本能的ともいえる生存のための欲求が満たされる必要があると説く。小説と評論とを交互に執筆することで、生涯に渡り、自分の思索を深めていったハックスリー最後の長編小説『島』を考察する際には、したがって、1958年に出版された『素晴らしい新世界再訪』よりも、1959年に行われ、ハックスリーの死後1978年に書き起こして出版されたカリフォルニア大学サンタバーバラ校での一連の講演、*The Human Situation*が、非常に有益な資料となる。本論では、この*The Human Situation*に『島』を読み解くヒントを求めながら、ハック

スリーは「自己実現」をどのように考えていたのか、また人間 (human being) をどのような存在と考えていたのかを考察する。

キーワード：自己実現 (self-actualization, self-realization, self-fulfillment), 人間 (human being), 潜在的可能性 (human potentiality), 変異性 (variability), 多様性 (diversity)

## I

1894年に生まれ、1963年11月22日、奇しくもケネディ大統領暗殺の日に亡くなったオールダス・ハックスリー (Aldous Huxley) の最後の長編小説『島 (Island)』は、1932年出版の『素晴らしい新世界 (Brave New World)』執筆を契機に、ハックスリーが考え始めた理想の社会を描いた作品である。『素晴らしい新世界』は、人工授精により人間としての発生の瞬間から死に到るまで、世界政府がコントロールする高度管理社会を描いたアンチユートピアの未来小説である。そこには、授精の時からアルファ、ベータ、ガンマと能力別に識別され、それぞれの階級に合わせた教育を受け、自己を省みることなく快楽に耽り、自分たちが身を置く社会にたいして何の疑問も抱かず、幸福であると感じて生きる人々の姿が描かれている。

『素晴らしい新世界』出版の30年後、1962年に出版された『島』で、ハックスリーはインド洋上の熱帯の架空の島、パラ (Pala) を舞台に、西洋の科学物質文明と東洋の精神文明を融合させた、自分の理想の社会を展開する。パラで産出される石油の利権を求めて暗躍するメジャー資本と、パラに隣接する架空の国、レンダン (Rendang) の軍事独裁政権の侵略とに、独立を脅かされている禁断の島パラの社会が、メジャー資本の走狗としてパラに侵入するイギリス人ジャーナリスト、ウィル・ファーナビー (Will Farnaby) の見聞を通して描かれる。『島』の小説内での時間設定は1961年で、当時の現実の世界情勢がフィクションの中に巧みに織り込まれている。パラに侵入しようとして難破し、夜中に崖をよじ登って傷ついたウィルに、パラの住人スシラ (Susila) が言う。「ここにはアルカトラズはありません…ビリー・グレアムもいなければ、毛沢東もないし、ファティマのマドンナもいません。地上の地獄もなければ、キリスト教がいう天国でのパイもない。二十一世紀にえがく共産党のごちそうもない。ただふつうに、男たちと女たちと子どもたちが、いまここで最善をつくす努力をしている…」(7)<sup>1</sup>

また、軍事独裁政権の大使であり大金持ちでありながらも、メジャー石油資本にパラの

石油採掘による多額のリバートを臆面もなく要求する、隣国レンダンの大使バフー (Bahu) 氏も、「このすばらしい島では、すべての男、すべての女、すべての子どもを、これ以上できないほどに、完全に自由で幸福になるように、完全に設計されている」(5) と言う。

ふつうの人々が「完全に自由で幸福になるように」、ハックスリーは社会のあらゆる側面を熟考し、パラの社会を設計する。キース・メイ (Keith May) が、それを次のように要約している。「肉体労働の効用、協同組合的な経済組織、産児制限、対抗はするか利潤追求型ではない新聞諸紙、犯罪や非行を最小限に抑える方法、子どもたちへの性教育、自然と芸術の効能、幸福な家族形態、多様な気質や能力を持つ子どもたちに対するすべての教材が関連しあうような総合的な教育の方法」<sup>2</sup>、さらにマイナスイオンをも利用するホリスティックな医療など、1961年当時においては最先端であったり、まだ世に認められていない医学や心理学の情報に加え、社会学、哲学、宗教、芸術など百科事典的と評された広範囲におよぶ知識を駆使して、ハックスリーは1961年の時点で実現可能であろうと予測した理想の社会を提示する。

## II

ハックスリーは、自分の思想を小説と評論のふたつの形で表現し、小説と評論を交互に発表することで、自身の思索を発展させ深めていった。1958年出版の評論集『新世界再訪 (*Brave New World Revisited*)』のなかで、ハックスリーは1960年代後半のアメリカで、消費文化に溺れ民主主義が標榜する自由と平等を省みることもしない若者たちを、「栄養のゆきとどいたテレビ漬け人間」<sup>3</sup>と呼び、かつて『素晴らしい新世界』で描いたアンチユートピアの高度管理社会の現実化に警鐘を鳴らしている。そういう時代背景もあってか、ハックスリーは1958年前後、カリフォルニア大学サンタバーバラ校やマサチューセッツ工科大学などさまざまな所で、一連の講演をしている。The Human Situation と題されたこの講演をハックスリーは出版するつもりはないと述べていたが<sup>4</sup>、彼の死後、1978年にそのままのタイトルで出版されることになる。編集者のピエロ・フェルッチ (Piero Ferrucci) は、1959年のサンタバーバラ校で行われた講演が一番包括的であるので、この講演を選択したと序文で述べている。この講演の内容は多岐に及び、地球環境の諸問題、自然破壊や人口増加の問題から、社会や政治という人間活動の諸問題、また個人の潜在能力とその実現 (realization) まで、イートン校在籍時に眼疾を患い、目が悪くまで医学の道を志していたというハックスリーの豊富な自然科学の知識を援用して、展開されている。

ハックスリーは常に思索を続け、自論を発展させているので<sup>5</sup>、『島』を読み解く際には、この『ハックスリーの集中講義 (*The Human Situation*)』が有益な資料となる。1959年12

月14日の「人間の潜在的可能性 (Latent Human Potentialities)」と題された講演のなかで、ハックスリーは次のように言う。

I want to talk in this lecture about a subject which is of profound importance to everyone: the possibility of realizing latent human potentialities. I think we don't have to flatter ourselves by imagining that we have already realized all the potentialities with which we are born. There are many, in almost all of us, which might be released and made effective. As a matter of historical fact, human beings have actualized faculties and powers which in the past had been completely latent and unimaginable. Our biological make-up has not really changed since the upper Paleolithic, and we are now using much more effectively exactly the same natural equipment we had fifteen or twenty thousand years ago. This is a very encouraging fact. It shows that man can get more out of himself without necessarily changing himself biologically. (下線部筆者)

ここで、ハックスリーは、人間の肉体は旧石器時代の後期からほぼ変化していないが、認識され具現されるべき人間の潜在的な能力と可能性はまだまだであると述べている。人間の潜在的な能力や可能性とは何かを知るためには、まず人間とはいかなる存在であるかを知らなければならない。ところが、人間とは何かというこの非常に単純そうに見える問題には、いまだに明確な答えがない。ハックスリーも、サンタバーバラ校の学生たちに向けて、「われわれは何であるか (Who are we?)」という問いに答えようとするのは非常にむずかしいと言いながら、古今の学者の論を引いてハックスリーなりの解説を試みている。この問題は、詮じつめればソクラテスの時代にすら既に非常に古い格言であったという「汝自身を知れ」にたどり着く。

*The Human Situation* で、ハックスリーはまず人体の解剖学的多様性について具体的な例をあげて説明する。たとえば、「肥ったひとの腸は、痩せたひとにくらべて2倍も重く、すくなくとも50パーセントは長く、それゆえずっと効率よくはたらき」、また「脳下垂体の重さは、まったく正常なひとでも、350ミリグラムから1100ミリグラムまでの差があり」、「甲状腺は8グラムから50グラム、副甲状腺は50ミリグラムから300ミリグラム…松果腺の重さは軽ければ30ミリグラムから重ければ400ミリグラムまであり、正常な膀胱は少なければ200,000のランゲルハンス島があり、多ければ1,800,000もあります」<sup>6</sup>と話す。また、進化の段階を上がるにつれて種の変異性 (variability) が高まるので、人間の変異性は他のどの種よりも高いと言う。したがって、人間は基準化してしまうにはあまり

にも変異がありすぎ、たとえば薬を例にとっても、同じ薬に対して示す反応は人によって様々であり、この生化学的変異は薬理学者をたいへん悩ませるもののひとつであると述べる。そして、「これらの解剖学上、生理学上の相違は…ある程度はわたしたちの精神的心理的生活に反映されるにちがいない」<sup>7</sup>と話す。

肉体という側面から考えてみるだけでも、これだけの変異が人間にはあるので、身体的特徴がある程度精神活動に影響を与えることを考慮すると、ほかのいかなる生物よりも多彩で活発な精神生活を営む人間を基準化、パターン化することは非常に困難である。ハックスリーは、このような多様性 (variability) をもつ人間という存在 (human being) が、画一化の傾向をもつ社会のなかで、その多様性を発揮できるような環境を作ることが大切であると述べる。そして、「ひとりひとりが平等な栄養と教育の機会を持つてはじめて、個人の生まれつきの素質がどんなものであるかを完全に理解できるのです。そうなつてはじめて、生来の素質が栄養不良の悪影響とか、教育機会の欠除とかによって隠されることなく、可能性が最大限に発揮されるのです。」<sup>8</sup>と言う。

ハックスリーは、人間の自己実現のためには、まず必要最低限の生きていくための条件が満たされねばならず、十分な食糧供給と教育の機会を与えられることの重要性を説く。The Population Explosion と題する講演で、ハックスリーは次のように語る。

if, as I think most of us would agree, the end of human life is to realize individual potentialities to their limits and in the best way possible, and to create a society which makes possible such a realization, then we find ourselves equipped to think in a rational and philosophical way about the population problem. We see that in very many cases the effort to raise human quality is being thwarted by the mere increase of human quantity, that quality is very often incompatible with quantity. We have seen that mere quantity makes the educational potentialities of the world unrealizable. We have seen that the pressure of enormous numbers upon resources makes it almost impossible to improve the material standards of life, which after all have to be raised to a minimum if any of the higher possibilities are to be realized: although it is quite true that man cannot live without bread, and if simply cannot provide adequate bread, we cannot provide anything else. Only when he has bread, only when his belly is full, is there some hope of something else emerging from the human situation. (下線部筆者)

また、ハックスリーは、十分な食糧が供給され教育の機会が与えられる社会の重要性を、

Latent Human Potentialities と題した講演のなかでも述べている。

In fact, a reasonably good society where people are properly fed and are not subject to too terrible frustrations is the one in which we can expect potentialities best to be fulfilled in the best way. Ideally, in order that individual potentialities may be completely developed in all individuals, we should have a perfect society. This is a consummation devoutly to be wished, but it is one which is not likely to be fulfilled within any foreseeable span of time. Therefore I shall not spend any time in this lecture discussing the social reforms which are desirable for the purpose of helping individuals to fulfill their potentialities. (下線部筆者)

この講演においては、ハックスリーは、すべての個人において潜在的可能性を完全に発達させることができるような社会については具体的に述べていないが、『島』において、自身の理想とする社会を描いていくのである。

### III

個人の潜在的可能性を十全に発揮できるような機会を与える社会をパラに設定し、ハックスリーは理想の社会を展開していく。パラは地形に恵まれず、良港を建設することができなかつたため、アラブ人によるイスラム教化も、さらにはヨーロッパ列強による植民地化をも免れ、1000年以上の歴史があると思われる段々畑により、食糧は自給自足できる。産児制限の普及により、急激な人口増加を引き起こすこともなく、相互養育クラブ (Mutual Adoption Club) を導入することにより、核家族が孤立することもない。余剰食糧は輸出し、獲得した外貨はパラでは生産できない物資を輸入するために使われる。また、パラの人々 (Palanese) は、自己充足して幸福であるため、欲求不満解消のための消費に走ることもなく、穏やかな里山的なスローライフを営んでいる。そこは、「人間 (human beings) をよその経済やテクノロジーにあわせるのではなく」、「いつも経済とテクノロジーを人間にあわせるような選び方をしてきた」(9) 社会でもある。しかも、パラの人々は、幼い頃から「気づくこと (awareness)」の訓練をほどこされているため、自分の気質、性格、適性を十分に自覚しており、いろいろな職業を体験した後に、自分にあった職業を選択する。したがって、自分自身を過大評価も過小評価もすることなく、等身大の自分が能力を発揮するのに最適な環境を選択することができるのである。

これらのパラの人々とは対照的に描かれているのが、パラのラジャに嫁いできた隣国レ

ンダンのスルタンの王女であったラーニ (the Rani) とその息子ムルガン (Murugan) である。<sup>9</sup> 殊にラーニの描写は辛辣で、時には醜悪でさえある。娘時代に留学したスイスで、ラーニは神智学と出会い、のちに「精神の十字軍 (the Crusade of the Spirit)」を主宰するに至る。ラーニは、自身が主宰する宗教団体のための資金を得るために、パラの石油の採掘権を、メジャー資本を率いるジョー・アルデハイドに売ろうと考えている。母親のラーニを崇めるムルガンは美しい若者で、レンダンの独裁者ディパ大佐 (Colonel Dipa) にかわいがられており、ジャーナリストのウィルは、ディパ大佐とムルガンの関係を、ハドリアヌスとアンティノスの関係ではないかと疑う。ウィル自身も、文学作品を書く時間とお金を得るために、ジョー・アルデハイドの走狗となるのであるが、自分の浮気が原因で妻が事故死したことに罪悪感をもっており、またそういう罪悪感を抱く自分自身に嫌悪感を感じている。ニヒリズムに染まった西欧知識人を体現しているウィルの姿は、幸福感とは程遠く、自分が不幸であると感じているが、不幸であるという自覚があるだけ、ラーニやムルガンに比べれば救済の余地があるように描かれている。

パラでは、自己実現の道を歩み、自己充足し幸福と感じながら暮らす人々は、「ふつうの人々」である。ビジャヤ (Vijaya) と共に、ウィルを瞑想の部屋に案内するラオ夫人 (Mrs Rao) は、ぽっちゃりした四十代半ばの女性で、あまり知的ではないが、献身的なおひとよしの善人として描かれている。農業試験場で働くラオ夫人が、ウィルに次のように語る。

I'm too dumb to be any good at the things that Dr Robert and Vijaya are good at—genetics and biochemistry and philosophy and all the rest. And I'm no good at painting or poetry or acting. No talents and no cleverness. So I ought to feel horribly inferior and depressed. But in fact I don't—thanks entirely to the *moksha*-medicine and meditation. No talents or cleverness. But when it comes to living, when it comes to understanding people and helping them, I feel myself growing more and more sensitive and skilful. . . . So you see, Mr Farnaby, Pala's the place for stupid people. The greatest happiness of the greatest number—and we stupid ones are the greatest number. People like Dr Robert and Vijaya and my darling Ranga—we recognize their superiority, we know very well that their kind of intelligence is enormously important. But we also know that our kind of intelligence is just as important. And we don't envy them, because we're given as much as they are. (11)

ウィルに語るラオ夫人の顔は、自己充足と幸福感で輝いている。特別の才能も知性も持た

なくとも、パラでは自分の持つ能力を最大限に発揮することこそが大切であると認識されているのである。ウィルの傷の手当てをしたドクター・ロバートに向かって、ウィルがブレイクの『地獄の格言』から引用する、「もしもおろか者がおろかさに固執するならば彼は賢者になる」(8)。自分の人生を十全に生きることが、人生を生きる知恵であり、人生を全うすれば、その人の人生は十分に価値のあるものだといえよう。そして、そのような人生が結果的に、人に有限の人生において永遠の相を垣間見せるのである。したがって、パラでは住民のスシラが、「わたしたちの興味は良い人間 (human beings) をつくることです」(7)と行うように、子どもだけでなく、大人になってからも自分自身を教育できるよう、瞑想の部屋を始めとして様々な工夫が施されている。さらに、パラの人々は「赤ん坊の時から世界を十分に自覚し、その自覚を楽しむようにおしえられて」おり、「もっとも日常的なもの、ごく些細なことも、宝石や奇蹟としてみることができる」。したがって、「スクーターやウィスキーやテレビやビリー・グレアムや、その他の気晴らしや補償のたすけ」(9)は必要ないのである。

#### IV

このように、すべての人間がその個性に合わせて、持てる力を発揮しながら人生を全うできるように設計されたパラの教育の目標は、「自己実現 (actualization)」で、「完全に実現された人間になる (being turned into full-blown human beings)」ことである。(13) さて、日本語の「自己実現」に相当する英語は、self-actualization, self-realization, self-fulfillmentがあるが、『島』においても *The Human Situation* においても、ハックスリーはそのいずれの語も使用していない。パラの学校を見学するために訪れたウィルに向かって、パラの教育方針を説明する文部次官のミスター・メノン (Mr Menon) の言葉に、actualizationがあり、*The Human Situation* のなかに、realization と fulfillmentがあるのみで、いずれの場合もself-を欠いている。<sup>10</sup> 1960年代初頭、self-actualizationもself-realizationも一般的に使用されていなかったため、ハックスリーはそれらの語を使わなかったのかもしれないと推測できるが、1959年、サンタバーバラ校の学生たちに、生物学のなかでもまだ新しい分野の学問の名前、エコロジーを説明するハックスリーが<sup>11</sup>、一般に使用されていないからといって、使用を控えるとは考えにくい。それよりもむしろ、selfという語の定義が非常に困難なため、敢えてその使用を避けたのではないかと推測するほうが妥当であろう。selfという語の定義が異なれば、自ずから「自己実現」という語の定義も変わってくるからである。また、サンタバーバラ校の「人間の潜在的可能性 (Latent Human Potentialities) と題された講演のなかで、人間の欲求は一定の階層を為すと述べ、

それについてはマズローの考えが役に立つと言っている<sup>12</sup>、ハックスリーが self-actualization という語を知らなかったとは考えられない。たとえ self- の語がなくとも、ほとんどの場合、そこでハックスリーが展開しているのは、とりもなおさず「自己実現」という考えだからである。

では、意図して self- を用いなかったとすれば、ハックスリーは actualization, realization, fulfillment の各語をどのように区別して用いていたのであろうか。actualization の「実現」は、現実の社会のなかで自分の個性を具現していくことであるから、子どもたちの教育の目標として掲げるには、いかにもふさわしい。actualization の語が示す「実現」は、現実の具体的な活動に限定されるように思われるからである。realization の語は、「実現」や「達成」の意味のほか「認識」など精神的な活動を意味する場合もあるので、時によっては意味が非常に曖昧になる。また、特に realization に self- をつけると、この場合の「実現、達成、認識」は、人間の種としての潜在的可能性を考えると、多義的に解釈できるので、self-realization という語は、思索のきっかけのツールとしては興味深い語であるが、個人がその人生において自分の望みや欲求を叶えるという単純な意味での「実現」には、fulfillment が一番ふさわしいように思われる。この場合の日本語の訳語は「自己達成」が近いかもしれない。

人間の種としての変異性 (variability) の高さのため、個人の相違は他の生物であれば、新しい種を形成するほどのものであるかもしれない。したがって、「人間とは何か」という問いはこれからも続けられていくであろうし、一朝一夕には答えが出ないからといって、問うことをやめてしまえば、人間 (human being) の存在そのものをも脅かす精神の荒廃をもたらすことにもなりかねない。したがって、「自己実現」という語の定義は困難であろうが、議論し模索していかなければならないと考える。ちょうどハックスリーが癌に侵されながらも、晩年まで精力的に旅行し、読書し、思索を続けたように。

## <註>

1. 『島 (Island)』と『ハクスレーの集中講義 (The Human Situation)』の日本語訳は片桐ユズル氏によるものであることを記しておく。また、括弧内の数字は、『島』の章を示す。
2. May, Keith. *Aldous Huxley*. p.213.
3. Huxley, Aldous. *Brave New World Revisited*. p.96.
4. Smith, Grover. Ed. *Letters of Aldous Huxley*. p.860.
5. たとえば、1958年出版の評論集 *Brave New World Revisited* のなかでは、人口増加の問題を扱うに際し、over-population という語を用いていたが、その後サンタバーバラでの講演においては、human

explosionという語を使用している。

6. Huxley, Aldous. *The Human Situation*. p.64.
7. Huxley, Aldous. *The Human Situation*. p.64.
8. Huxley, Aldous. *The Human Situation*. p.73.
9. このラーニの容貌は、神智学協会の創設者であるブラヴァツキー夫人を彷彿とさせる。また、白いサテンのパジャマを着た美しいムルガンの姿に、外見だけは、インドの神智学協会に見出されイギリスで教育を受けた、若き日のクリシュナムルティを見ることができる。ハックスリーは、第2次世界大戦前からクリシュナムルティと親交を結び、クリシュナムルティの思想をもとに建てられた学校の創設にも参加しているので、このムルガンの描き方には疑問が残るが、二十代後半に神智学協会と決別したクリシュナムルティは、母親のスカート影に隠れている十七歳のムルガンとは違う生き方を選択したということでもあろうか。
10. 一部は、本論II章の引用の筆者による下線部を参照されたい。
11. Huxley, Aldous. *The Human Situation*. p.34.
12. Huxley, Aldous. *The Human Situation*. p.238.

#### <引用および主要参考文献>

- Dunaway, David King. *Aldous Huxley Recollected: An Oral History*. New York: Carroll & Graf, 1995.
- . *Huxley in Hollywood*. New York: Harper & Row, 1989. New York: Doubleday, 1991.
- Huxley, Aldous. *Brave New World & Brave New World Revisited*. New York: Harper & Row, 1965
- . 『すばらしい新世界ふたたび』 高橋衛右訳 (近代文芸社, 2009年)
- . Ferrucci, Piero. Ed. *The Human Situation*. London: Chatto & Windus, 1978.
- . 片桐ユズル訳 『ハクスレーの集中講義』 (人文書院, 1983年)
- . *Island*. London: Chatto & Windus, 1962.
- . 片桐ユズル訳 『島』 (人文書院, 1980年)
- . 片桐ユズル訳 『多次元に生きる』 (星雲社, 2010年)
- Huxley, Laura Archera. *This Timeless Moment*. London: Chatto & Windus, 1969.
- . 大野龍一訳 『この永遠の瞬間』 (星雲社, 2002年)
- クリシャン・クマー著 菊池理夫・有賀誠訳 『ユートピアニズム』 (昭和堂, 1993年)
- May, Keith. *Aldous Huxley*. London: Elek, 1972.
- Maslow, A. H. *Motivation and Personality*. New York: Harper & Row, 1954.
- . 小口忠彦訳 『人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティ』 (産能大学出版部, 1987年, 2003年)
- Sawyer, Dana. *Aldous Huxley: A Biography*. New York: Crossroad, 2002.
- Smith, Grover. Ed. *Letters of Aldous Huxley*. London: Chatto & Windus, 1969.